

英語教育と文学的教材 [12] †

－豊かな心をはぐくみ、コミュニケーション能力の素地を養う小学校の英語活動－

皆川 典子*・幡山 秀明**
宇都宮市立御幸が原小学校*
宇都宮大学教育学部**

In the new edition of “Guidelines for the Courses of Study,” English language activities for 5th and 6th graders have been made compulsory. The main objectives are: 1) to lay the foundation of pupil’s communication abilities through foreign languages; 2) to develop an understanding of languages (English) speaking cultures through various experiences; 3) the fostering of a positive attitude toward communication; 4) to familiarize students with the sounds and basic expressions of foreign languages (English) in its various forms.

Then, what is “the foundation of pupil’s communication abilities”? and how to foster it? In this paper, I’d like to approach these questions from my experience and ideas to propound proposals. And, my report is on what I have challenged so far in order that pupils have a great interest in English.

キーワード：小学校，英語活動，新指導要領，コミュニケーション能力の「素地」，豊かな心

1. はじめに

1.1 教育の今日的課題から

現代の子どもたちを取り巻く社会環境はめまぐるしく変化している。少子化や核家族化が進む中、子どもたちは様々な体験をする機会が減り、コミュニケーションの希薄化が社会的な問題となっている。かつて子どもたちは、家庭や地域で多くの大人に囲まれ、兄弟も多く同学年のみならず異学年の子どもたちとも親密な遊び仲間を形成しながら、他者とのかかわりを学んできた。しかし現在では、テレビゲームの普及などにより、遊びも個人的なもの、少人数のものへと変化しており、遊びの中で相手の気持ちを意識したり、自分が肯定的に受けとめられていると感じたりする機会が少なくなってきた。人間関係をつくる基盤が弱体化しているということである。

21世紀は国際化がこれまで以上に進むはずである。情報化に伴うインターネットなどの通信網や交通手段の発達は我々の生活と外国語（英語）との関係をより深いものにもすることも間違いない。社会や経済のグローバル化が急速に進展する中で、現代の子どもたちが大人になる頃にはより一層世界の国々

とのつながりが強くなり、世界の人々とかかわる機会は増えていくであろう。子どもたちがこのような国際社会を生きていくためには、国際感覚を身につけ、多様な文化や習慣、価値観を受け入れ、偏見をもたずに理解し合い、協力し共生していくことのできる態度の育成が重要であり、次代を担う国際性豊かな人材を育成するための教育の充実が求められている。

1.2 新学習指導要領における英語教育と「会話科」の実施に向けて

これまで、小学校の英語活動は総合的な学習の時間の中の国際理解教育の一環として行われていた。今回の学習指導要領の改訂では、総合的な学習の時間の「指導計画の作成と内容の取り扱い」における配慮すべき点として「国際理解に関する学習を行う際には、諸外国の生活や文化などを体験したり調査したりするなどの学習活動が行われるようにすること」と示されており、あくまでも「探求」としての総合的な学習の時間の趣旨に添った活動である必要がある。なお、小学校第5学年及び第6学年に「外国語活動」が新設された。外国語活動では「外国語を通じて言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養

† Noriko Minakawa*, Hideaki HATAYAMA**: English Education & Literature as Teaching Materials [12]

* Miyukigahara Elementary School, Utsunomiya

** Faculty of Education, Utsunomiya University

う」ことが目標とされており、次の3つの柱から成り立っている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③ 外国語を通じて、コミュニケーション能力の素地を養う。

国際化がさらに進展する中、子どもたちがさまざまな人たちと協力し、共に生きるためには、国際的に広く使われている英語によるコミュニケーション能力が求められている。

筆者の勤務する宇都宮市では、今年度（平成21年度）から市内の全公立小学校において英語活動が実施され、市からALTが派遣されている。また、平成24年度からは1年生から6年生までの児童に「ことばの時間」と「英会話の時間」からなる「会話科」が実施される予定である。

「英会話の時間」では、友だちとのかかわりを大切にしたい体験的なコミュニケーション活動を通して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の素地及び基礎を育成し、次のような子どもを育てることを目標としている。

○英語に慣れ親しみ、聞くこと・話すことを楽しむ子ども

○英語を使った相互理解や相互交流に興味をもち、意欲的に取り組む子ども

筆者はこのような今日の課題や学習指導要領の改訂等の背景を踏まえ、コミュニケーション能力の素地を養うための方策を模索してきた。

2. 児童期の特徴

児童期は好奇心が旺盛で新たな事象に関する興味・関心が高く、言語をはじめとして異文化に関しても自然に受け入れられる時期である。想像力を使うことを好み、柔軟な適応力がある。特に低学年になるほど異文化に対する違和感をもたず、世界の国々の人と自然に接することができる。また、音に対する感覚が鋭敏で、聞こえてきた音を正確に再現したり、話し方を真似したりできる。大人の話声を一つのかたまりとしてとらえる力に秀でているので英語の音声習得には最適な時期でもある。

もちろん「児童期の特徴」といっても、小学校は1年から6年までと幅広く、発達段階により特徴も異なった様相を呈するのは言うまでもない。例えば、

低学年では児童が集中できる時間は15～20分程度であるが、聴覚が優れ暗記が得意である。歌やチャントなどのリズムにのって、自然に英語の音を体得することができる。中学年になってくると、友達とも上手に遊べるようになり、自己中心的な行動が減ってくる。高学年の児童は思考力・理解力が発達してきて知的要求を満たす内容を求めるようになる。

このように発達段階に違いがあるものの、児童期に英語に触れることは、コミュニケーション能力を育てる上でも、国際理解を深める上でも、大変重要な体験になると考えられる。また、日本語とは異なる言語に触れることにより、言語の面白さや豊かさに気付いたり、言語に対する関心を高めたりすることができる。これは国語力の向上にも相乗的な効果をもたらすものと思われる。

3. コミュニケーション能力の素地を養うために

「コミュニケーション能力の素地」とは何なのだろうか。新指導要領では「『コミュニケーション能力の素地』とは、小学校段階で外国語活動を通して養われる、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみをさしたものである」と示されている。

筆者はこの『コミュニケーション能力の素地』のそのまた土台となる根底にあるものが「自尊感情をもち、互いに尊重し合う心」や「相手を思いやり、理解しようとする心」などの豊かな心であると考えられる。自他の個性を尊重し、互いにわかり合いたいという気持ちや互いを大切に思う気持ちがなければ、コミュニケーションは成り立たないと考えるからである。コミュニケーションは「心と心をつなぐ架け橋」なのである。コミュニケーション能力の素地を養うためには心を耕す必要があるのではないだろうか。そのために筆者がこれまでに実践してきた具体的な方法については後述するが、ここではまず指導者（教師）の態度について考えてみたい。教師自身が児童一人一人の個性を尊重し、一人一人のよさを認め、一人一人を大切にすることは大前提である。では、教師の「英語」に対する態度についてはどうであろうか。子どもたちの『コミュニケーション能力の素地』を養うには、まず教師自身が英語活動の楽しさを感じ、コミュニケーションを積極的に図っていくという態度が必要である。教師は児童の英語に対する態度の形成に大きな影響を与えている。

要は教師の英語力ではなく、教師の英語に対する態度である。教師は英語学習者のモデルとして英語を積極的に使うことを心がけ、例えば英語に自信がなくても、ALTに「何とかして伝えたいことを伝えよう」と一生懸命にジェスチャーなどを駆使してコミュニケーションを取ろうとしたり、児童と一緒に活動そのものを楽しんだりすることが大切なのではないだろう。教師の学ぼうとする姿勢こそが、教師自身の積極的に外国語活動に関わっていこうとする意欲や姿勢こそが、子どもたちの「コミュニケーション能力の素地」をつくる原動力になると考えられる。もちろん、身振り手振りや簡単な単語を駆使するだけでなく、教師自身の英語運用能力を高めるために自己研鑽を続ける必要があるのは言うまでもない。

4. 豊かな心をはぐくみ、コミュニケーションの素地を養うための取り組み

筆者は平成20年度末まで宇都宮市立細谷小学校に勤務していた。細谷小学校では英語活動は総合的な学習の時間「細谷タイム」の中で3～6年生まで年間10時間実施され、1～2年生は各教科との関連において、例えば、英語の歌は音楽、“color”の学習なら図画工作の中でというように実施してきた。

ALTの学校訪問はあったが、各学年とも年に1度程度だったので基本的には学級担任が英語活動を指導していた。平成20年度は「自ら考え、意欲的に活動する児童の育成」を研究主題とし、教職員一人一人が専門性を高めるために「一人一研究」に取り組んできた。筆者は「楽しい英語活動の実践を通して」をサブテーマとし、総合的な学習「細谷タイム」の中の「英語にチャレンジ」で研究主題に迫った。

また、「チャレンジ細谷っ子」と題し、毎年夏休みを利用してサマースクールが行われていた。図工・水泳・ダンス・音楽・家庭科などに関する、児童の興味・関心を高めるようなさまざまなコースを設定し、1年生から6年生までの学年縦割りの希望者がそれぞれのコースに分かれて活動を行うもので、楽しみながら達成感や成果が得られるものである。筆者はここで「元気! English!」を立ち上げ、簡単なあいさつや、歌、ゲーム等の活動を行ってきた。希望者の縦割りで行うよさが発揮され、5・6年生が1・2年生に上級生らしくやさしく接しながら楽しく活動し、学年枠を超えた充実した活動ができた。この「チャレンジ細谷っ子」の活動で学年の交流ができ、コースが終了したあとも仲良く話をしている

姿が見られた。

平成21年度赴任した宇都宮市立御幸が原小学校は「自他を大切に思う心、大切にできる態度、実践力にあふれる児童の育成—自分・他者・地域とのかかわりを通して—」を研究主題に人権教育に取り組んでいる学校である。まさしくこれは筆者が考えるところの、英語活動のめざすものと同じである。そもそも国際理解教育は「広い視野をもち、異文化を理解するとともにこれを尊重する態度や異なる文化をもった人々とともに生きていく資質や能力の育成を図る」ことや「国際社会において相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意見を表現できる基礎的な力を育成する」ことをねらっている。そのためにはまず、普通の学校生活、普通の授業の中でお互いの個性を認め、互いに尊重しあうことが、世界の、異なる文化をもった人々とともに生きていくことの第一歩などではないだろうか。なお、本校では1～4年生の英語活動は「予備」としての時数を充て、実践している。筆者は1年生担任であるが、「英語活動でもっと生き生き!もっと仲良く!」と自分なりのスローガンを常に念頭に置き、指導に当たってきた。

以下、前任校である細谷小学校と現在の勤務校である御幸が原小学校での数々の取り組みの中から、コミュニケーション能力の素地を養うために効果的と思われる実践について述べていきたい。

4.1 英語活動の時間における実践

①意欲を高めるための工夫

児童が夢中になって活動に取り組むことができるようにするにはどうしたらよいただろうか。英語活動だけでなく、どの教科にもいえることだが、「楽しい授業」には児童は集中して取り組み、意欲的に活動することができる。歌やチャンツ、ダンス、ゲームなどを数多く取り入れ、楽しい雰囲気づくりに努める。楽しい会話やゲーム等の活動を通して進んで英語に親しもうとする意欲を高めることができるよう工夫した。意欲の持続化を図るために、1時間の中で様々な種類のアクティビティを織り込む。数種類の歌やゲーム、静かな活動、体を動かすような動きのある活動などである。その際、教師側からの一方的な押し付けでなく、児童の思い、興味関心を大切にしたい。例えば「歌」であるが、歌の選曲については次のようにした。短い休み時間や、給食の配膳の時間、帰りの用意をしている間などの隙間時間を利用して英語のいろいろな曲を流し、英語の歌に

親しました。その際に子どもたちの様子を観察し、楽しそうに身体表現をしながら聴いたり、何度も聴いているうちに口ずさんでみたり、「あつ、これ知ってる、知ってる」などどうれしそうに話したりしていた歌を書きとめておき、英語活動の時間に少しずつ取り上げてみるようにしている。前任校では3年生、本校では1年生を担当しているが、おおむね子どもたちの反応は同じで、簡単に歌いやすい歌や覚えやすい歌よりもむしろ、曲のテンポが速くて躍動的な歌や日本語で歌ったことがある歌が非常に人気が高い。1、3年生に共通して人気の高かった歌は、Bingo, Head and Shoulders, Twinkle Twinkle Little Star, It's a Small World, Mickey Mouse March, Old Macdonald Had a Farm, Country Road などである。It's a Small WorldやCountry Roadなどは非常に難しい曲ではあるが、子どもたちは「わあ、難しい」と言いながらも目はきらきらと輝いている。子どもたちの吸収力は実にすばらしく、筆者よりも早く歌えるようになってしまった。

さらに、興味・関心をもつような教材・教具を選び、提示の仕方も工夫する。例えば、ピクチャーカードでは児童に「何だろう？」と興味をもたせるために[?]と書いた袋の中にカードを入れ、絵の上から、ときには下からゆっくりとスライドさせたり、素早くほんの一瞬だけ見せたりする。児童の集中力を高めるためにも有効である。

また、発達段階に応じた活動内容を吟味することも重要である。児童は歌やチャンツ、ゲームなど元気がよく体を動かす楽しい活動が好きであるが、学年が上がるに従い、「単純なゲームでは満足しない」「元気に歌ったり、身体表現をすることに抵抗がある」という児童も増えてくる。特に高学年の児童の知的好奇心を刺激し、異文化理解につながるような活動を考えていく必要がある。

低・中・高学年といった発達段階だけでなく、他の教科の学習への興味・関心や取り組み方に個人差があるのと同様、英語活動への興味・関心や取り組み方にも当然個人差がある。言語を分析的にとらえる子もいれば、包括的にとらえようとする子もいる。音の違いが面白いと感じる子もいれば、文字への興味関心が高い子もいる。人前で大きな声で話すのが好きな子も、それが苦痛であると感じる子もいる。ゲームが好きな子もいれば嫌いな子もいる。

学級の児童（1年生）を対象にアンケートを実施

したことがある。以下に結果の一部を示す。

【英語活動に関するアンケート（30名）】

○あなたは英語活動の時間が好きですか。

好き…28名 ふつう…2名 きらい…0名

「好き」な理由…楽しいから、おもしろいから、よくわかるから、いろいろな英語が覚えられるから、友達と協力できるから、ゲームをしたり遊んだりするから、お母さんにほめられるから、外国人と話したいから等
「ふつう」と答えた理由…難しいけど面白いから。母にもっとイッパイ教えてもらいなさいと言われるから。

○どんな活動が好きですか。（複数回答）

・歌…28名 ・チャンツ…26名
・ゲーム…26名 ・友達との会話練習…21名
・みんなでの単語や文の練習…15名 （以下略）

このように、楽しいと思われるゲーム一つをとってみても100パーセント全員の子どもたちが「好き」と答えているわけではない。ほとんどの子どもたちが喜んで盛り上がっている陰で、中には「あまり楽しくないなあ」、「早くおわらないかなあ」などと感じている児童もいると考えて、いくら盛り上がっているからと言っても同じ活動ばかりを続けるのは避けたい。児童の多様な興味関心、得手不得手、アプローチの仕方に対応できるように児童の意欲を高める活動の在り方も多様化する必要がある。変化をもたせ、興味の持続化を図るためにもいくつかの異なるタイプの活動を組み合わせる必要があろう。我々教師は、子どもたちの反応から学ぶことが数多くあるのである。

②不安感や抵抗感をなくし、自信をもって英語活動に取り組ませるための工夫

自信をもって英語活動に取り組み、積極的にコミュニケーションをとろうとする態度を育てるためには、児童の不安感や抵抗感をなくしてあげて「間違えても大丈夫なんだ」という安心感をもたせる必要がある。そのためには英語活動の時間だけでなく、どの授業においても間違いや失敗を恐れず自分の考えを自由に発言できるような学級の雰囲気作りが大切である。教師自身がおおらかな態度で臨み、少しでもできたときには大いにほめ、児童が安心して参加できるようにする。個々のよさや伸びを積極的に評価し、できるようになったことを認め、励ます。

その他の不安感を取り除く手だてとして、以下の

・児童にとって身近なものや、絵などに表現しやすい具体

的な内容のものを扱うことで、「あつ、知ってる」「わかった、できた」という自信をもたせる。

- ・グループの友達と協力して楽しい歌の簡単な振り付けを考えたり、わからないところはお互いに教えあってゲームに取り組んだりすることができるようにさせる。
- ・身近な単語や一つの簡単な英語表現に対し、さまざまな方法で迫り、知らず知らずのうちに何度も繰り返し発話したり聞いたりすることで、自然に英語表現や単語を身に付けることができるようにする。
- ・簡単な単語から文へと、スモールステップで徐々に難易度を上げ、段階を追って自然に習得できるようにする。
- ・All in English で授業を行う場合、また、All in English でなくても教師が英語で指示をする場合は、ジェスチャーなどを交え、児童が理解できるようにする。
- ・児童の話はあいづちを打ちながら受容的態度で聞く。
- ・英語活動の授業の中だけでなく、学習した単語や例文を日常生活の中でも取り入れていったり、教室内に身近な英語のカードを常に掲示しておくなど、学級生活の中で繰り返し接する機会を設け、負担なく習得できるようにする。

日常的なこの取り組みの具体例はさらに後述する。

③ 豊かな心をはぐくむための工夫

豊かな心をはぐくむには、普段からの学級経営が基盤となるのは言うまでもない。豊かな心をはぐくみ、よりよい人間関係を築くための一つの方法として、学級活動や道徳の授業等の中で積極的に「エンカウンター」の手法を取り入れてきた。エンカウンターは開発的カウンセリングの技法として考え出され、集団個々の心と心のふれあいを深め、自己理解・他者理解ができ、人間関係づくりに大いに役立つものである。筆者がこれまでに行ってきた中で特に効果的であったと思われるエクササイズには次のようなものがある。

- ・「食べ物大好き」（4つの食べ物の中から好きな食べ物を選び、同じ食べ物を選んだ者どうして集まる）
- ・「なんでもバスケット」（アニマルバスケット、フルーツバスケット等、英語のゲームとしてもお馴染み）
- ・「じゃんけんエクササイズ」（あいこじゃんけん、あとだしじゃんけんなど）
- ・「この指と〜まれ」（自分の好みを伝え、同じ仲間を選んだ者同士指をつないでいく）
- ・「ウォンテッド！この人をさがせ」（インタビューし合い、カードに書いてある事に当てはまる人を見つける）
- ・「誕生日チェーン」（無言で1月1日生まれから12月31日生まれまでの順になるように輪をつくる）

・「タイムトラベル」（全員集合し、次に1～2名が集合から抜けかかれる。廊下に出ていた児童が、誰がいなくなったか当てる）

・「言葉リレー」（連想しりとりなど）

他にもまだ数多くのエクササイズがあり、短い時間でできるので、同じエクササイズでも何度も繰り返し行ってきた。英語活動の時間に、効果的で何度もやり慣れているこれらのエクササイズの中から英語を使ってできそうなものを選んで英語で行っている。「誕生日チェーン」は無言で行うからこそ効果が得られるとも考えられるが、質問の“*When is your birthday?*”のみを英語で言い、あとは黙って行うこともできるし、“*My birthday is December 1st*”まで発話しても「お互いを知る」「仲良くなる」という効果は得られるはずである。英語でのエクササイズも日本語とはまた違ったより楽しい雰囲気や、英語表現がわからないときに互いに教え合いながら進めることができ、なお一層温かさや親密さが増し、友達と仲良くなれる。

このように考えると英語活動そのものがエンカウンターであると言える。日本語では同じクラスメート同士、もしかしたら仲の良い友達同士であっても、あまり会話には出てこない「何色が好きですか」「青です」、「バナナは好きですか」「好きです」、「誕生日はいつですか」「4月1日です」などの表現を使いながら活動をするのである。これまで知らなかった相手のいろいろな情報がわかり、自分との共通点や相違点を見出すことができ、より親しくなれる。そして子どもたちは人と関わることのこちよさを味わうことになる。

心を豊かにする、心を耕す、心の栄養となるもう一つの活動が読書活動である。本を読むことで子どもは間接体験をする。自然に想像力が育ち、やがて経験する社会との関わりの中でも他人の気持ちが思いやれる心豊かな人間に成長する原動力となる。

筆者は英語活動の中で、絵本の読み聞かせを行ってきた。文学作品である絵本のすばらしさに気付き、言葉以上の何かを感じ取り、心の栄養としてほしいと考えたからである。また、絵本の読み聞かせを行ったり、絵本を自由に眺めることができる機会を与えたりすることで、外国語による物語や独特な言い回しなどへの興味、音と文字との関係、外国語の文字世界への親しみをもたせることができる。「次はどんなことが起こると思う?」、「どうしてこの

女の子はこういうことをしたのかな？」といった推論や読解につながる質問をし、日本語・外国語といった枠を超えた想像力、読解力を養う素地を作ることができる。

例えば、Bill Martin, Jr.の文と Eric Carle の絵でお馴染みの名作 *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* は子どもたちにぜひ読んで聞かせたい本の一つである。“Look at this book! I like this book. I'll read it. Listen to me and watch this book. Brown Bear, Brown Bear, what do you see? I see a redbird looking at me. Red bird Red bird what do you see?”といったように、様々な色と同時に動物が登場する。単に色の名前を知るだけでなく、色と動物との組み合わせが大変すばらしい作品である。絵を見ているだけでもわくわくしてくる。また、英語のリズムも美しく、子どもたちはすぐに音声を覚えてしまう。しかも、何度も繰り返し読んでも児童は飽きない。ときどき間違えた振りをしてページを飛ばして読むのも面白い。子どもたちはすぐに間違いに気付き、「先生、ちがうよ！」と得意顔で教えてくれる。読み終えたあとに、何の動物が何色だったか尋ねたり、目の色は何色だったかなど細かい部分の色を尋ねたりしても楽しい。

同じく Eric Carle 著の有名な *The Very Hungry Caterpillar* の大型絵本も見逃せない。約20か国語に翻訳され、日本でも多くの子どもたちが読んだことがある作品である。この絵本の読み聞かせを始めると、子どもたちは身を乗り出して目を見開いて夢中になり、本の世界へと引き込まれていく。さらにこの絵本を通じ、曜日の概念やチョウの成長サイクルについても学べる。

心あたたまる1冊として、Loe Lionni の *Swimmy* は見ているだけで優しい気持ちになり、勇気づけられる。他に同じ Loe Lionni 作で *A Color of His Own*, *Little Blue and Little Yellow*, また *The Rainbow Fish* (drawn and written by Marcus Pfister, translated into English by J. Alison James) もよい。

今後も、国や状況を越えて子どもたちを惹きつけてやまない絵本をぜひ教材として取り上げたい。

5.2 日常生活の中での実践

小学校の学級担任のよさは朝児童が登校したときから下校のときまで児童とともに生活を送れることである。そして、なんとといっても児童一人一人の興味・関心、生活経験、得意なこと・不得意なこと、

不安、学級の間関係、学級の雰囲気等を誰よりも理解していることである。年間わずか数時間の英語活動の時間以外にも毎日ほんの少しずつ英語に触れる機会を作っていくようにすれば、無理なく負担なく、児童が自然に英語に親しむようになるのではないかと考え、実践してきた。なお、変化をもたせたり、意識づけをしたりするために毎週金曜日を“English Day”とし、英語に親しむ頻度を増やした。もちろん、日常生活の中での活動も児童の発達段階や実態、興味関心を十分考慮し、負担過重にならないように配慮する必要があるのは言うまでもない。

以下、ある金曜日の例を示す。

朝、教室に入るとき“Good morning!”と挨拶をしながら入る。子どもたちも“Good morning!”と元気に返してくれて気持ちのよい一日の始まりを迎えることができる。

【朝の会】1.朝のあいさつ 2.健康観察 3.朝の歌 4.1分間スピーチ(さいころの目の数のテーマについて話す) 5.1分間体操 6.先生のお話
--

挨拶の後は、“What's the date today?” “It's March 3rd” “What day is it today?” “It's Friday.” “How's the weather today?” “It's sunny!”/“It's cloudy” “What's the temperature now?” “It's thirteen.”などと続く。

金曜日は健康観察を英語で行う。“Keiko, how are you?” 元気なら“I'm fine!” 風邪をひいているときは“I have a cold.”など。具合が悪いときは日本語でOKと言っているが、子どもたちの「英語で何て言うのか知りたい」という知的欲求を満たすため、「そういうときはこんなふうに言うといいかなあ」と答えているうちに、具合が悪いときに使う数々の表現を子どもたちは覚えてしまった。“I have a cough.” “I have a runny nose.” “I have a stomachache.” “I have a headache.” “Do you take some medicine?” “Yes, I do.” “No, I don't.” “Can you take part in P.E?” “Yes, I can.” “No, I can't.” 他にも“He is absent from school.”などである。

次の「朝の歌」であるが、1曲は毎月の音楽集会で歌う曲、もう1曲は月～木までは係の児童が選んだ曲または行事等で歌う曲の練習、そして金曜日には英語の歌を1曲歌っている。

体力作りと集中力を高めるために行っている「1分間体操」を金曜日には“One Minute Exercise”と

呼び、1 (one), 2 (two), 3 (three), 4 (four), 5 (five), 6 (six), 7 (seven), 8 (eight) と号令をかけながら行っている。国語や算数の授業の中で、例えば算数の答え合わせをするときに、自分の答えを発表する子が答えを言ったあとで“Is that right?”と聞き、正しいと思えば“*That's right*”, 間違えていると思えば“*That's wrong*”と答え、手を挙げて自分の答えを発表する。さらに、さまざまな場面で“*Thank you!*” “*You're welcome.*”とやりとりされる。教師がほめるときは“*Great!*” “*Very good!*” “*Excellent!*” “*Good job!*”と少しおおげさなくらいに喜びを表現しながらほめる。授業中、トイレに行きたくなったときは“*May I go to the restroom?*” “*Sure.*”他にも“*May I get some water?*” “*May I wash my chopsticks?*” “*May I wash my hands?*”など。誰の番なのか聞きたいときは、“*Whose turn?*” “*It's my turn.*”体育着に着替えさせるときなど“*Change your clothes, please.*” “*OK.*” (教師の英語でのインストラクションは他にもさまざまな場面で使っているが 相手が子どもであっても必ず *please* をつけるようにしている) じゃんけんするときには、自然と“*Rock, Scissors, Paper, 123! ...One more time!*”給食で「いただきます」をするときは“*Let's eat!*”「ごちそうさま」のときに“*It was delicious!*”給食といえば、月に1度 セレクト給食があるが、どちらがいいかを選ぶとき、例えば“*chicken*”か“*fish*”, “*pudding*”か“*jelly*”などと答えている。驚いたのは、「ココアあげパン」か「きなこあげパン」を選ぶとき、「先生、ココアはココアだよね? きなこは?」と聞いてきて「ココアは発音がちょっと違うね。cocoa [koukou] って言うよ」「きなこは、何だろう。ちょっと調べてみるね。あつ、“*soybean flour*”だって」と伝えたら、1か月近くたってセレクト給食の日に「あたし、*soybean flour*だよ」「ぼくは *cocoa [koukou]*」と話をしている。選んだ日から1か月近くの間その単語に触れることもなかったのにである。

帰りの会の一コマで“*Today's English*”を実施している。簡単な「ひとこと英会話」や身近な単語など1~2個を取り上げ、みんなで声に出して言うてみる。「係からのお知らせ」では、落し物係が“*Whose is this?*”とたずね、“*It's not mine.*” “*It's mine.*”など。帰りのあいさつは“*See you!*” “*Good bye!*”以上のように、特に金曜日はさまざまな場面で英語表現に親

しんできたが、金曜日の“*English Day*”以外でも子どもたちは自然に英語を口にしているときが多い。

【帰りの会】1.日頃の反省 2.係からのお知らせ
3.よいことの発表 4.今日のことわざ 5.Today's English 6.先生のお話 7. 帰りの挨拶

6. 児童の変容

ここでは英語活動に取り組むようになってから見られた児童の変容について述べる。

・英語活動で行うゲームなどを通して児童の間に新たなかかわりが生まれた。

・校内でALT と出会ったとき、自然に“*Hello!*”とあいさつができるようになった。中にはあいさつあと、簡単な英語表現を使って話しかけたり、質問したりしている児童もいる。“*It's sunny today.*” “*Do you like dogs?*” など知っている英語を使って積極的にコミュニケーションをとっている。

・英語の挨拶のみならず、心を開いて気持ちのよい「おはようございます」「こんにちは」の挨拶ができる児童が増えてきた。

・「先生、〇〇って英語で何て言うの?」と質問してきたり、「あれ?これは英語でなんていうんだろう」とつぶやいたりしている児童が多くなってきた。もっと知りたい、もっと学びたいという知識欲の現れであり、内発的な学びのエネルギーが高まってきているといえるであろう。児童に質問されて、もちろん答えられない(わからない)ときもある。そんなときは「わからない」と正直に答え、一緒に調べたり、後に伝えたりして、一緒に英語を学ぶという姿勢を見せるようにしている。例えば、虫が大好きな男の子たちが数名おり、次々と自分の知っている虫の名前を英語で聞いてくる。「先生、カマキリは何て言うの?」「クワガタって *stag beetle* って先生言ったよね。じゃあ、オオクワガタは *big stag beetle* でいいのかなあ」

英語活動を実践してみて一番うれしかったことはA児の変容である。入学当初、学級の中に自分の感情の処理がうまくできなくて、ささいなこと(名前を書き間違えてしまった、じゃんけんで負けてしまった、など)で大泣きし、他の人や物のせいにして例えば「このクレヨンが悪いんだあ!」と泣き叫びながらパニックに陥ってしまうA児がいた。A児は学習面での遅れも見られた。友達とのかかわり方もうまくできず、自分からは決して友達を遊びに誘

うことはおろか、話しかけることもしなかった。学級活動や道徳の授業などで、グループエンカウンターなどを行ったり、ソーシャルスキルなどの手法などを用いて友達とのかかわり方を学ばせてきた。1か月、2か月と経つにつれ、徐々にパニックを起こす回数が減ってきて、泣きそうになっても泣かずに頑張ったり、何かのせいにならずに自分の非を認めることができるようになってきた。しかし、自分から友達に話しかけることはなかなかできるようにならない。周りの友達もA児を誘って楽しく遊ぶというより、A児のめんどろをやさしくみてあげる、遊んであげるという感じであった。1年生なので夏休み前ぐらいまでは、まず学校生活に慣れること、学校に楽しく登校できることを目標に一人一人の児童理解に努め、学級経営を充実させるとともに、学習面では国語・算数の基礎基本をしっかりと身につけさせることを重点に考え、英語活動は夏休み明けぐらいから少しずつ取り入れてきた。A児は英語活動での歌やゲームには笑顔で取り組み、少し恥ずかしそうにしながらも他教科と比べると元気に取り組むことができた。友達と協力して行うゲームやパートナーを見つけて簡単な会話をするようなゲームなどを少しずつ行うに従って、A児の表情は生き生きとし、活動の中で自分から友達に積極的に話しかけたり、ペアワークのパートナーを自分から見つけることができるようになった。これらのゲーム等で使用する英語表現はとても簡単なものであるため、A児も喜んで活動に参加できる。物怖じせず、何度も繰り返し発話しているうちにどんどん自信をもって取り組めるようになり、上達もしてくる。そうすると周りの友達のA児に対する態度も徐々に変化するようになった。初めはやさしく親切にめんどろをみてあげるという感じであったが、他教科ではなかなか見せない英語活動の時間のA児の活躍ぶりに「〇〇くん、すごい」と驚き、完全に対等な友達関係ができてきた。ひいては休み時間等においても、かつてのように親切心から同じクラスの友達だからA児を遊びに誘うというよりほんとうにA児と遊びたいという気持ちからA児を誘い、またA児のほうも自分から自然に友達と一緒に校庭に出て遊ぶという姿が見られるようになったのである。遊びだけでなく、「〇〇くんは英語ができてすごい」と友達にも認められ、家の人にも褒められ、他教科の学習においても自信をもって一生懸命取り組むようになり、苦手

な学習にもあきらめずにがんばる姿が見られるようになった。教師としての喜びもひとしおである。

B児は、おとなしくて、入学してから数か月の間みんなの前ではほとんど声を出せなかったが、英語を使った活動を友達とともに夢中になって楽しんでいうちによく笑うようになり、自然と大きな声を出せるようになり、日常のさまざまな場面において積極性が見られるようになった。B児の変容も非常にうれしい。

普段から落ち着きがなく、集団行動をとることが難しいC児。自分勝手なふるまいが多く、友達に対していばっている。周りの友達が寛容な態度で接しているのでもうかやトラブルにはならないが…。そんなC児であるが、夏休み明けごろから特に不安定になり、わがままな行動がかなり目立つようになり、個別指導が必要になってきた。計算や漢字の練習など自分が好まない学習にほとんど取り組まず、声をかけ、励まし、手伝ってあげないと学習が進まない状態であった。体育の授業でドッジボールを行ってもルールを守らず、ボールを当てられても「当たっていない」と言い張り、外野に出ない。そんなC児であったが、ちょうどそのころから始めた英語活動の時間の中では意気揚々と取り組み、理解も早く歌やチャンツ、ゲーム等の活動で活躍する機会が増えていった。そして、ゲームでもしっかりとルールや順番を守りながら取り組んでいけるようになってきたため教師や友達から認められることで英語活動の時間だけでなく、遊びの中や他教科においても徐々にルールが守れるようになってきた。学習にも落ち着いて取り組めるようになってきた。C児の変容もこの上もない喜びである。

今後さらに「豊かな心をはぐくみ、コミュニケーション能力の素地を養う英語活動」についての研究を深め、実践していきたい。

参考文献・サイト

小学校学習指導要領解説 総則編、外国語活動編、総合的な画級の時間編

長瀬荘一「英語遊び面白ゲーム集」明治図書

後藤典彦・富田祐一「はじめてもよう！小学校英語活動」

八巻寛治「心ほぐしの学級ミニゲーム集」小学館

菅正隆「小学校英語活動ガイドブック」ぎょうせい

<http://www.bunkei.co.jp/eigo/teacher06.html>

<http://www.tcp-ip.or.jp/ainuzuka/20010628e1-teigakuunen.htm> (本稿の実質的著者は皆川典子教諭です)